

独標への追悼登山や式典についての
思いをつづった文集を作る



深志高西穂落雷事故

「42年目の独標」に思い

北アルプスの西穂高岳で集団登山中に落雷に遭い、11人の仲間を亡くした松本深志高校の昭和43年度卒業生が、10日に同校で卒業40周年の記念式典を開く。記念事業実行委員会（上条誠二委員長）は、今年8月1日の追悼登山や深志高での追悼式に参加した同期生の思いをまとめた初の文集「42年目の独標（どっぴょう）」を作っており、記念式典で配る予定だ。文集を通して、同期生それぞれの思いを確認し合う。

（小岩井貴之）

同期生が初の文集

◇西穂高岳独標落雷事故 昭和42年8月1日
午後1時40分ごろ、上高地から入山して集団登山中だった松本深志高校2年生の先発隊46人（うち教師5人）が、北アルプス西穂高岳（標高2,909メートル）に登頂後、帰り道にある岩稜（りよう）の独標（標高2,701メートル）で落雷に遭った。生徒11人が死亡、生徒と引率教諭13人が重軽傷を負った。

同期生20人と、当時を知る先輩3人が寄稿した。今年の追悼登山や式典をどのような気持ちで迎え、何を感じたか、昭和42年の事故後、どのような思いで生きてきたかなどを、それぞれの立場でつづっている。

当時の登山に参加せず、今年初めて独標に登山と常に思い、励みにしてきた。

文集には今年の追悼登山の写真約20枚も掲載し、A4判50ページ程度になる。300部を印刷し、式典に出席した約170人の同期生に配る予定だ。

つたという青柳和比古（59）が書いた。今夏の追悼登山後、参加者から「節目となる今年こそ文集を作ろう」との声が上がった。全国に住む同期生に声をかけ、9月上旬までに賛同者から原稿を集めた。編集を担当した深志高教諭の鈴木潤一（59）は「松本市里山辺は「同期生はみんな、あの事故を通じて生きる意味や命について考えてきた。共感してもらえと思う」と話していた。